

ロールシャハ・テストの体験型と人間像 による自我機能の分析

林 悦 子

A analysis of ego function by experience types and
human figures of the Rorshach Test

Etsuko Hayashi

〔はじめに〕

ロールシャハ・テスト（以後ロ・テストと略す）は、人格構造を探る手段として最もよく利用されているテストである。とりわけ、運動反応と色彩反応は、このテストの中でも人格測定のための二大指標とも言い得る重要な情報を提供している反応である。

それらについては、従来より数々の解釈仮説が述べられている。

色彩反応に対しては、被験者が色彩を処理する方法は、外界からの影響を統合する手腕を求める環境からの情緒的衝撃に反応する方法を指示するという方向で解釈が成され、外的刺激（環境）に対する反応性を測る目安であり、一方、人間運動反応（以後、*M* 反応と記す）は、“知能”、“想像力”、“内的安定性”、“価値体系”、“自己受容性”、“共感性”、“自己概念”の指標となり、良質のそれらの存在は、「被験者が空想活動へ比較的自由に赴ける事を示している。それは、現実とのよい結びつきの中での、高度の情緒の統合性を示し、その情緒の統合性に於て自我は原始的衝動に耐え、原始的衝動を創造的なエネルギーとして自由に引き出すことができる。*M* の共感性の面は、対象との良好な関係をもつ能力を示し、それは情緒統合性の結果であり条件である。外界との良い結びつきは、典型的な *M* 反応に示されている知覚の分化度・統合性の高いことに示されている。^{註1}」として、それ自身よく発達した自我機能を表わしているものと解釈されている。

この2種類の反応に注目して、当初より Rorshach, H. は、“体験型”という概念を用いている。これは、*M* 反応と色彩反応の比率と程度に従って、内向、外拡、両向、両貧型のタイプに分類したものである。ここで示す内向とは、外的世界よりも、自己の内的心的生活に主に興味に向かう事であり、その人の活動がより多く精神的領域で行なわれ、彼の価値体系によって現実を再構成することを示し、外拡とは、外的刺激の同化、情緒的な可疎性を示し、それらが強くなる程、情緒を外に表現し、外からやってくる力に受動的に服従するなど、すべての面で環境によく反応し、現実場面を正確に知覚するか否かにかかわらず、見えたままを受け入れ、自己の欲求に従って現実を再構成する傾向はなく、そのままを受け入れる事を意味している。ここでいう内向—外拡は、リビドーが人格に向かう方向性を示したものであり、従来より用いられている社会的な向性としての内向的 (introverted)、外向的 (extraverted) ではない。したがって、ここで体験型の示す情報がリビドーの方向性とした場合、体験型によって“両向型の人”、“内向型の人”、“外拡型の人”、“両貧型の人”に分類したならば、おのずと各グループ間の被験者の

精神機能の間に、何らかの違いが認められるであろう。

また、われわれが、日常生活の中に於て、最も高い緊張を伴う外的な環境は、対人関係ではないかと思われる。この対人関係における適応のあり方というものは、その個々人の精神機能によって左右されるところが多いのではないだろうか？ したがって、体験型によって分類されたグループには、何らかの意味でその適応上のやり方の違いが認められるだろうし、まして対人関係における認知方法が異なってくると思われる。

Piotrowsky, Z. A. は、「*M* 反応は、被験者の心のうちに深く存し、容易には変えられず重要な場面に当って、同じ態度をくり返させる原型としての役割である。」と述べている。

また、Beck の知見として、古くから *M* 反応を伸張運動反応 (*extensor M* 反応)、屈曲運動反応 (*flexor M* 反応)、阻害運動反応 (*blocked M* 反応) に分け、*extensor M* 反応をみる人は、独断的・支配的行動を示す人、*flexor M* 反応を示す人は、困難に対する屈服の要求を示す人、*blocked M* 反応は優柔不断や不決断をあらわすという事が述べられている。それらの知見の妥当性を調べるため、質問紙上の人格検査と比較した多くの報告がある。〔Wetherhorn, M. (1956), Talubee, E. S. (1961) ……〕

また、*M* 反応の反応内容に注目した研究として、Parker, R. S. (1963) の研究があり、その中で *M* に投影された像と *self-image* の関係を調べるものがある。

林 (1974, 1975) は、*M* 反応に示された Actor 特性 (どういった人物を投影しているのか?) と Action の内容 (攻撃的か?、協調的か?、被害的か?) と、各被験者の行動特性、及び自我機能とのつながりを調べ、その結果、協調的な内容のものは質問紙法 (Y-G 性格検査) の社会的外向尺度と、攻撃的なものは、社会的不適応、情緒不安定尺度と関係があり (1974)、*M* 反応内容が自我機能によって変化する (1975) という知見を得ている。

ここで、体験型によって、人格の共通構造を捉えた時、そのグループ間にリビドーの向かい方及び機能の仕方 (*ego-strength*) の違いがおのずと存在するであろうし、適応の仕方にも違いがあるであろう。まして、対人関係・対人知覚の違いもそこに認められるはずであろう。

〔目 的〕

本研究においては、大学生・神経症者、精神分裂病者を対象として、Rorschach, H. の“体験型”の概念を用い、それらの外的環境への適応水準を検定するとともに、体験型によって示された“両向タイプ”、“内向タイプ”、“外拡タイプ”、“両貧タイプ”という人格の共通構造の中に、そこに示された外界に対する適応の違いを検討し、対象関係、特に対人関係に何らかの違いが認められるのかという事をロ・テストの *M* 反応の質を通して分析してみる事にある。

〔方 法〕

被験者 (Ss)

大学生：26名 (男・女13名)、年齢 (Range; 19: 01~27: 03, Mean; 20: 7, SD; 2: 06)

男子学生は京都大学薬学部、教育学部、文学部、工学部の2・3・4年生。女子学生は京都教育大学幼児教育学科の1・2・3年生。

神経症者：26名 (男・女13名)、年齢 (Range; 14: 11~60: 00, Mean; 27: 02, SD; 11: 06)。精神科・神経科で通院医療を受けている患者である。症状は、心気症、不安神経症を示している。

精神分裂病者：26名 (男・女13名)、年齢 (Range; 17: 00~64: 02, Mean; 36: 09, SD; 11:

01). 精神科で精神分裂症として入院医療を受けている患者である。

実験手続き

ロ・テスト……個別に実施された。各被験者に対して、自由反応段階→質疑段階→限界検査まで反応する事が要求された。記号化は、クロッパー法による。

分析方法……分析 1

- (1) M 反応, 色彩因子反応, H 反応の比較 (大学生, 神経症, 精神分裂病者群)
- (2) 大学生, 神経症, 精神分裂病者群の体験型の比較。

体験型を以下の 4 グループに分類する^{註2}。

- I 群 (両向型) : $M \geq 3, FC + CF + C + C' \geq 3$.
- II 群 (内向型) : $M \geq 3, FC + CF + C + C' < 3$.
- III 群 (外拡型) : $M < 3, FC + CF + C + C' \geq 3$.
- IV 群 (両貧型) : $M < 3, FC + CF + C + C' < 3$.

分析 2

大学生, 神経症, 精神分裂病者の M 反応の比較。

- (1) M 反応の型

- extensor M ……重力に打ち勝ち, 空間を拡げる運動。
例) 踊っている。飛び上がっている。
- flexor M ……重力のままになり空間を縮める運動。
例) おじきをする。うずくまっている。
- blocked M ……動こうとの努力に拘ず, 動けない運動。
例) 押し合っている。引っぱり合っている。

- (2) M 反応の Actor の分析

Actor 内容

- i) 層性を持つ人。人間。文化的隔りを持つ人。
- ii) 衣に身を包む人。架空。
- iii) 動物。
- iv) 顔, 手, 足, その他。

- (3) M 反応の Action の分析

- 協調的 M 反応 …… 協調的動作をしている場合。運動の中によい感情的色彩が含まれた場合。
例) 仲良く踊っている。かわいらしいかんじ。
- 攻撃的 M 反応 …… 攻撃的動作を示している場合。
例) 斗っている。取り合っている。
- 被害的 M 反応 …… 被害的内容が含まれている場合。気味の悪い印象が語られた時。
例) 襲いかかってくる。つぶされかかっている。

分析 3

体験型 4 グループ毎の M 反応の比較。

- (1) M 反応の型
- (2) M 反応の Actor 内容
- (3) M 反応の Action 内容

〔仮 説〕

分析 1

- (1) *M* 反応, 色彩因子反応, *H* 反応。

M 反応は, 内的統制力を示す指標である。したがって, 大学生は有意により多くの *M* を投影するであろう。

色彩因子は, 外的反応性を示す指標である。したがって, 精神分裂病者においては, それを回避する傾向がみられるであろう。

H 反応は対人関係の疎通性, 共感能力を示すものである。大学生群, 神経症者群, 精神分裂病者群における社会的適応力の違いがここに反映されるだろう。

- (2) 体験型

体験型を自我の機能のあり方として捉えたならば, 自我の構造の違いによって, その型が違って来るであろう。

分析 2

- (1) *M* 反応の型

Extensor *M* が支配的行動を示す人, flexor *M* は困難に対する屈服の要求を示す人, blocked *M* が優柔不断な人を示すとすれば, 大学生は extensor *M* 反応を他より多く投影するだろう。神経症群はより, flexor *M*, blocked *M* が多いだろう。

- (2) *M* 反応の Actor 内容

社会的適応水準と Actor 内容に有意な関係が示されるだろう。

- (3) *M* 反応の Action 内容

Action 内容に, 大学生群, 神経症群, 精神分裂病者群の対人関係での認知の仕方の違いが反映されるであろう。

分析 3

体験型を自我の機能の違いとしてみたならば, 対人関係のあり方にも違いが認められ, それが *M* 反応内容に投影されるであろう。

〔結果と考察〕

分析 1

Table 1. Student 群, Neurosis 群, Schizophrenia 群の *M* 反応, $\Sigma C+C'$ 反応, *H* % の \bar{X} , *SD*. 一覧表

group	n	<i>M</i>		$\Sigma C+C'$		<i>H</i> %	
		\bar{X}	<i>SD</i>	\bar{X}	<i>SD</i>	\bar{X}	<i>SD</i>
Student	26	4.62	3.38	5.17	3.29	23.96	11.1
Neurosis	26	3.04	3.07	5.13	4.05	18.38	11.7
Schizophrenia	26	2.15	2.38	2.63	4.23	17.08	11.7

- (1) *M* 反応, 色彩反応, *H* % について

Table 1 は, 大学生 (St と略す) 群, 神経症 (N と略す) 群, 精神分裂症 (Sch) 群の *M*

反応数, $\Sigma C+C'$ ($FC+CF+C+FC'+C'F+C'$) 反応, H 反応パーセンテージ (H/R) の平均値, 標準偏差値を示したものである。また, Table 2 は, それらの平均値の有意差を分散分析法によって検定したものである。その結果, M 反応に関しては, St 群は平均 4.62 個の M 反応を投影し, N 群は 3.04 個, Sch 群は 2.15 個反応し, N 群と Sch 群の間に有意な差は認められないが, St 群と N 群の間に有意な差がある傾向 ($t=1.9381$ $p<.10$), St 群と Sch

Table 2. Student (St) 群, Neurosis (N) 群, Schizophrenia (Sch) 群における M 反応, 反応, %の分散分析表

	変動因	平方和	自由度	平均平方	F	t	
M	級 間	97.92	2	48.96	5.6250*	St×N	1.9381(*)
	級 内	647.73	75	8.64		St×Sch	3.2980**
	全 体	745.65	77			N×Sch	1.9017
$\Sigma C+C'$	級 間	100.42	2	50.21	2.7664(*)	St×N	0.0339
	級 内	1360.88	75	18.15		St×Sch	2.1496*
	全 体	1461.30	77			N×Sch	2.1158*
H %	級 間	1177.03	2	588.52	4.2515*	St×N	1.7100
	級 内	10382.09	75	138.43		St×Sch	2.1084*
	全 体	11559.12	77			N×Sch	0.1911

**..... $p<.01$ *..... $p<.05$ (*)..... $p<.10$

群の間に有意な差がある ($t=3.2980$ $p>.01$) ことを示している。 M 反応は, 元来色彩反応などと比較して, より深いレベルでの人格に関与し, パーソナリティを動かす原動力のようなものであり, 精神発達の成熟度と関係し, 内的な統制力を示すものであるとされている。本研究において, St 群が他の群に比して, M 反応が多く 4.62 個みられたという事は, 明らかにかかる経験的仮説を支持するものであったという事ができる。

色彩因子の投影力に対しては, St 群, N 群の間に差は認められず, これら 2 群と Sch 群の間にも有意な差が認められたことを示している (St×Sch $t=2.1496$ $p<.05$, N×Sch $t=2.1158$ $p<.05$)。このことは, 精神分裂病者の特徴である外的環境への無関心, 反応性の希薄さを反応しているのものであると考えられる。

H %に対しては, St 群と Sch 群の間にのみ有意差がみられた ($t=2.1084$ $p<.05$)。この事柄も色彩反応の乏しさと共に, 分裂病者の病像としての人間関係の逃避, 自閉性につながるものではないかと考えられる。したがって, これらの M 反応, 色彩因子反応, H 反応に対する仮説は, 一応支持されたものと思われる。

(2) 体験型について

Table 3 は, 3 群における体験型のタイプの頻度を比較したものである。その結果, 3 群の間に明らかに体験型のタイプの違いがある事を示している ($\chi^2=27.0409$ $p<.001$)。I (両向) 型に属するものは, St 群が最も多く, 続いて N 群→Sch 群の順であり, St 群と Sch 群の間

Table 3. Student 群. Neurosis 群. Schizophrenia 群 による
体験型一覧表. および体験型頻度の χ^2 -test.

体験型	St	N	Sch	χ^2 -test	体験型	χ^2 -test						
I (両向)	12	10	4	$\chi^2=27.4709^{*}(*$ $df=6$ $p<.001$	I	7.5000* <table border="1" style="display: inline-table; vertical-align: middle;"> <tr><td>St×N</td><td>0.1818</td></tr> <tr><td>St×Sch</td><td>4.0000*</td></tr> <tr><td>N×Sch</td><td>2.5714</td></tr> </table>	St×N	0.1818	St×Sch	4.0000*	N×Sch	2.5714
St×N	0.1818											
St×Sch	4.0000*											
N×Sch	2.5714											
II (内向)	5	2	3	II	1.4000							
III (外拡)	7	10	2	III	5.1579(* <table border="1" style="display: inline-table; vertical-align: middle;"> <tr><td>St×N</td><td>0.5294</td></tr> <tr><td>St×Sch</td><td>0.9412</td></tr> <tr><td>N×Sch</td><td>5.333(*</td></tr> </table>	St×N	0.5294	St×Sch	0.9412	N×Sch	5.333(*	
St×N	0.5294											
St×Sch	0.9412											
N×Sch	5.333(*											
IV (両貧)	2	4	17	IV	17.3044*** <table border="1" style="display: inline-table; vertical-align: middle;"> <tr><td>St×N</td><td>0.1667</td></tr> <tr><td>St×Sch</td><td>11.8420***</td></tr> <tr><td>N×Sch</td><td>8.0476**</td></tr> </table>	St×N	0.1667	St×Sch	11.8420***	N×Sch	8.0476**	
St×N	0.1667											
St×Sch	11.8420***											
N×Sch	8.0476**											

***..... $p<.001$ **..... $p<.01$ $*p<.05$ (* $<.10$

には、5%水準 ($\chi^2=4.000$) で有意な差があった事を示している。この事は、St 群が Sch 群に比べ、内的資質が高く、また外界に対する反応性も豊かである事を示している。II (内向) 型においては、3群の間にかなる有意な差も認められなかった。III (外拡) 型においては、有意な差を示す傾向があり ($\chi^2=5.1579$ $p<.10$)、N 群と Sch 群の間に有意な差が認められている ($\chi^2=5.333$ $p<.05$)。このことは、N 群が Sch 群に比べ、外的刺激に対し、情緒的な反応性が豊かであるという事を示していると考えられる。IV (両貧) 型においては、明らかに、Sch 群が他の2群に比して、より多くこの型に属するものがあると考えられる。このことは、Sch 群が他の2群に比して、内的にも外的にも反応性が乏しいという事が考えられる。

以上の体験型の比較を通して全般的に考えられる事柄は、Sch 群が、他の2群に比して、人格の弾力性が乏しく、自我の虚弱性、自我の機能の低さを示し、人格の荒涼とした状態を示しているのではないかという事である。これは、分裂病の病の特徴とも考えられるが、その中でも初期症状を呈したものというより、長期の投薬医療を受けている欠陥状態の人々を被験者として用いた影響も含まれるのかもしれない。また、St 群、N 群の間で有意に至るまでの差が認められなかった。これは、大学生・神経症者は自我機能としてはあまり変わりなく、その発症の有無は、同次元での差異であって、概括的には捉えられず、詳細な分析を必要とする事を示しているのかもしれない。この2群と Sch 群の間には、自我機能のあり方に次元を異にする隔りがある事を意味しているのかもしれない。また、St 群、N 群の適応レベルの差は、より反応内容に投影されるところが多いのかもしれない。

分析2

分析2は、M 反応の反応内容を、St 群、N 群 Sch の3群の間で比較したものである。

(1) M 反応の型について

Table 4. Student 群, Neurosis 群, Schizophrenia 群における M 反応のタイプの頻度、および百分率一覧表、ならびに M タイプによる 3 群間の比較。

() ……%

Mの型	St	N	Sch	χ^2 -test (%による)	Mの型	χ^2 -test
Extensor	67 (55.8)	32 (42.7)	26 (46.4)	$\chi^2=17.6816^{**}$ $df=4$ $p<.01$	Extensor	1.886
Flexor	42 (35.0)	43 (57.3)	24 (42.9)		Flexor	5.6694(*)
Blocked	11 (9.2)	0 (0)	6 (10.7)		Blocked	10.1712** St=N CR=2.7035* St×Sch CR=0.1121 N×Sch CR=2.9653**

**…… $p<.01$ *…… $p<.05$ (*)…… $p<.10$

Table 4 は、3 群間の M 反応の型を extensor M, flexor M blocked M に分類し、その出現頻度を示したものである。検定は、3 群間の M 反応の絶対数に有意差があるため、各型が出現するパーセンテージによって成された。extensor M に対しては、3 群間の出現率に有意な差が認められなかった。

flexor M については、N 群がより出現率が高く、重力のままになる姿勢、運動感覚の乏しい M 反応が多いという事を示している。この事は、flexor M が持つ“困難に対する屈服の要求を持つ人を表わす”という指標の意味と、神経症という症候群の示す不適応感という屈服の表現に相通じるものがあると思われる。また、posture M 反応は、M 反応の本質的要素である運動感覚というものが乏しく、それのもつ M としての意味も恐らく弱められると考えられる。したがって、内的安定性というものも、N 群においては、その絶対数に示されるもの程獲得しえてないかもしれないと思われる。

blocked M においては、St 群、Sch 群の間に有意な差は示されず、これら 2 群と N 群の間に有意な差が認められた (St×N CR=2.7035 $p<.05$, N×Sch CR=2.9653 $p<.01$)。阻害運動反応は、“互いに押し合っている。” “引っ張り合っている” などの同じ力が働き、動こうとの努力にもかかわらず、体が動かないという内容の M である。経験的にその存在は、“知的な人によくみられ、優柔不断や不決断をあらわすといわれる。この型の人には、重要な生活問題を処理する必要のある時に、なかなか最終決定に到達しえないし、そういう場面では非常な緊張感を生じ不安になりがちである。しかし、重要なことをしない普通の場合には、機知のある人で物事をうまくやっていたり人である。すなわち、阻害運動反応を示す人は、問題や場面で重要と思えるほど懐疑性が強くなり、強迫傾向がたかまるのであると解釈されている。本研究においては、本来その存在が認められるのであろうと予想された N 群において示されず、社会的適応者と想定された St 群、病識の欠如している Sch 群に同じ位の比率をもって表われた。この事は、あらかじめ予測された仮説に反するかのように考えられる。本研究に示された結果より、blocked M の提供する情報は、重要場面の問題処理における緊張感の存在

とそれに対する不適応感を表わしているが、混乱が更に意識化された時には、かえって反応し難いかもしれない。この事については、更なる研究を要するものである。

また、本研究では St 群、N 群、Sch 群を比較するため、便宜上パーセンテージによつての比較を試みたが、M 反応の場合同様、その出現頻度によつて示されたものでなく、その絶対数のあり方によつて用いた場合の方が、それのもつ意味を強く表わすのかもしれないという事が考えられる。その事に対する検討も必要であろう。

(2) Action 内容について

Table 5 は、M 反応に投影された反応内容について St 群、N 群、Sch 群の間で比較したものを示したものである。i) には、人間(属性を持って表現された場合も含む)、文化的隔りを持つ人、ii) には架空の人、衣に身を包み身を隠している人、iii) には動物、iv) には顔

Table 5. Student 群, Neurosis 群, Schizophrenia 群における M 反応の Actor 内容の頻度. および百分率一覧表. ならびに, Actor 内容グループの出現百分率による 3 群の比較.

() 内は%

Actor 群	St	N	Sch	χ^2 -test (%による)	Actor 群	χ^2 -test						
i	84 (70)	46 (61.3)	31 (55.4)	$\chi^2=23.7043^{**}$ $df=6$ $p<.01$	i	1.7346						
ii	16 (13.3)	15 (20)	17 (30)		ii	6.6948* <table border="1" style="font-size: small;"> <tr><td>St×N</td><td>CR=0.9879</td></tr> <tr><td>St×Sch</td><td>CR=2.3859*</td></tr> <tr><td>N×Sch</td><td>CR=1.2729</td></tr> </table>	St×N	CR=0.9879	St×Sch	CR=2.3859*	N×Sch	CR=1.2729
St×N	CR=0.9879											
St×Sch	CR=2.3859*											
N×Sch	CR=1.2729											
iii	7 (5.8)	2 (2.7)	4 (7.1)	iii	1.9654							
iv	13 (10.8)	12 (21.4)	4 (7.1)	iv	8.4107* <table border="1" style="font-size: small;"> <tr><td>St×N</td><td>CR=1.6918</td></tr> <tr><td>St×Sch</td><td>CR=0.6359</td></tr> <tr><td>N×Sch</td><td>CR=2.4913*</td></tr> </table>	St×N	CR=1.6918	St×Sch	CR=0.6359	N×Sch	CR=2.4913*	
St×N	CR=1.6918											
St×Sch	CR=0.6359											
N×Sch	CR=2.4913*											

**..... $p<.01$ *..... $p<.05$

などの、身体の部分のみを反応内容として表現している事を意味している。

Table 5 にみられるように、Actor 内容について 3 群間に有意差があり、その中で ii と iv において有意な差が認められた。

ii の反応内容に関しては、St 群が 13.3%、N 群が 20.0%、Sch 群が 30.0%、という出現頻度を持ち、St 群と Sch 群の間に有意な差が認められた (CR=2.3859 $p<.05$)。ii グループは記号化にすると主として (H) 反応で示される反応である。(H) 反応は、人間そのものとしては現実性の少ないものである。したがって、それを反応特徴とするものは、自分自身の身体や対人関係についての知覚が非現実的であるといわれている。また、H 反応の場合と同様、対人関係への関心と感受性を示すが、人間関係に敏感すぎて不安をもち、それより社会

的に孤立する傾向を意味し、また人間知覚の低下も意味し、それより同性愛の指標であるとする見解もある。精神病理学上、Sch 群において ii の反応内容が多く示された事は（本来的に人間反応は他群に比べ投影される事は少ないが）、上記の知見を支持するものと解釈される。

iv の反応内容については、N 群と Sch 群の間に有意な差がみられた ($CR=2.4913$ $p<.05$)。Hd 反応をとまなう M 反応は、人間関係での不安を反映し、Rorshach, H. は、`Hdが増えるに従って不安が高くなる。`と述べている。また、従来より Hd が多くなることは、精神が混乱しているために全体がみられない、また身体部分への関心が強いことのあらわれであるとも考えられ、ここで N 群において iv が多くなったことは当然の結果ともいえる。

M 反応に示された反応内容の特質といったものが、明らかに各症候群の自我機能の defense mechanism を反映している事に注目される。以上より、分析 2、仮説 は支持されたものと考ええる。

(3) Action 内容について

Table 6 は、St 群、N 群、Sch 群の M 反応内容を協調的活動を示している時、攻撃的内容を示している時、被害的内容を示している時、に分類してその出現頻度を比較したものである。本研究においては、これらの間にかなる有意な差も認められなかった。これらについても出現パーセンテージを用いるより、その絶対数によるものの方が重要な情報を提供するのではないかという事が考えられる。また、林の研究 (1974) にあるように、質問紙法の自己評価

Table 6. Student 群, Neurosis 群, Schizophrenia 群における M 反応の Action 内容の頻度および百分率一覧表、ならびに Action 内容の現百分率による 3 群の比較。

() 内は%

Action	St	N	Sch	χ^2 -test (%による)
協調的 (co)	51 (42.5)	26 (34.7)	16 (28.6)	$\chi^2=7.8772$ $df=6$
攻撃的 (Agg.)	6 (5)	2 (2.7)	2 (3.6)	
被害的 (dam)	9 (7.5)	11 (14.7)	10 (17.9)	N. S.
中性的 (Neu)	54 (45)	36 (48)	82 (50)	

とこれらが一一致した傾向が得られるなど、人格構造というより、もっと意識的な内省的態度との間のかかわりが多い指標であるのかもしれない。

分析 3

分析 3 は、体験型による M 反応内容の比較を試みたものである。

(1) M 反応の型について

Table 7 は、体験型 (I: 両向型, II: 内向型, III: 外拡型, IV: 両貧型) によって、M

Table 7. 体験型別による反応 M の型の頻度, および百分率一覧表, ならびにその比較
() 内は%

Mの型	I	II	III	IV	χ^2 -test (%による)	Mの型	χ^2 -test
Extensor	80 (51)	19 (40.4)	14 (60.9)	12 (50)	$\chi^2=11.6063^{(*)}$ $df=6$ $.05 < p < .10$	Extensor	4.1630
Flexor	64 (40.7)	26 (55.3)	8 (34.8)	11 (45.8)		Flexor	5.1273 ^(o)
Blocked	13 (8.3)	2 (4.3)	1 (4.3)	1 (4.2)		Blocked	2.3142

(*)..... $p < .10$ (o)..... $p < .20$

反応の型に何らかの違いが認められるかを検定したものである。その結果, IIグループ(内向型)が flexor M を多く示す傾向があった ($\chi^2=5.1273$ $p < .20$) が, 有意な差を認めるまでには至っていない。この事より, 外的刺激に対する反応性の機能が十分でなくて, 自己の想像性に頼るところが多い人は, 若干神経質傾向が認められるのかもしれないという事が考えられる。

分析2での M 反応の型の結果同様, extensor M 等良好な指標はその絶対数として考えられた時, その本来もっている意味がより強く示されるのかもしれない。

(2) Actor 内容について

Table 8 は, 体験型別による M 反応の Actor 内容を比較したものである。その結果, Actor 内容 iii (動物内容)において, IIIグループ(外拡型)と, IVグループ(両貧型)に $CR=3.2527$ ($p < .01$) で, IIグループ(内向型)と IIIグループ(外拡型)の間に $CR=2.5725$ ($p < .05$) で有意差が示された。これは, 色彩反応の存在と A に置きかえられた M 反応の存在との間に逆の関連性があるのではないかという事を考えさせる結果である。おそらく外拡タイプの人, 対人関係においても刺激がストレートに知覚されやすいと考えられる。対人への感受性が高く, より意識的レベルで処理されやすいのではないかとと思われる。また, Actor 内容 i においても体験型の間で有意な差を示す傾向がみられた ($\chi^2=5.6940$ $p < .20$)。これによると IIグループ(内向型)の人が若干, 人間運動反応の内容を脚色する傾向があるようである。これは, 外界への反応性が弱くて, しかも内界に関心が向かう事が多い時, 独自の思考方法に頼り, 外界不適応傾向を持つ可能性があるという事を示しているものと思われる。

(3) Action 内容について

Table 9 は, 体験型によって M 反応の Action を比較したものである。その結果, 被害的内容を持つ M 反応 ($\chi^2=28.2519$ $p < .001$) に有意差が, また攻撃的内容をもつ M 反応に有意な差を示す傾向がある ($\chi^2=4.3424$ $p < .20$) ことを示している。

被害的内容の M 反応に関しては, 内向タイプである程, その出現頻度が高まるという事を示している。これは, 明らかに外界への反応性が弱く, しかも, 内界とのコミュニケーション

林：ロールシャッハ・テストの体験型と人間像による自我機能の分析

Table 8. 体験型別による M 反応の Actor 内容の頻度および百分率一覧表。
ならびにその比較

() 内は%

体験型 Actor	I	II	III	IV	χ^2 -test (%による)	Actor	χ^2 -test	CR
i	103 (65.7)	24 (51.1)	18 (78.3)	16 (66.7)	*** $\chi^2=29.3262$ $df=9$ $p<.001$	i	5.6940 ^(c)	
ii	31 (19.7)	11 (23.4)	3 (13.0)	3 (12.5)		ii	4.9219	
iii	6 (3.8)	4 (8.5)	0 (0)	3 (17.0)		iii	14.3839**	III × IV 3.2527** II × III 2.5725* I × III 1.4364 I × IV 1.9072
iv	17 (10.8)	8 (12.5)	2 (8.7)	2 (8.3)		iv	4.3268	

***..... $p<.001$ **..... $p<.01$ *..... $p<.05$ (c)..... $p<.20$

Table 9. 体験型別による M 反応の Action 内容の頻度, および百分率一覧表,
ならびに体験型による Action の比較

() 内は%

体験型 Action	I	II	III	IV	χ^2 -test (%による)	Action	χ^2 -test	CR
協調的 (co)	59 (37.6)	15 (31.9)	8 (34.8)	11 (45.8)	*** $\chi^2=39.2565$ $df=9$ $p<.001$	協調的 (co)	2.8680	
攻撃的 (Agg.)	7 (4.5)	2 (4.3)	1 (4.3)	0 (0)		攻撃的 (Agg.)	4.3424 ^(c)	
被害的 (dam)	18 (11.5)	10 (21.3)	0 (0)	1 (4.2)		被害的 (dam)	28.2515	*** II × III 4.3985** II × IV 3.1883** I × III 3.0963** I × IV 1.5900
中性的 (Neu)	73 (46.4)	20 (42.5)	14 (60.9)	12 (50)		中性的 (Neu)	3.7604	

***..... $p<.001$ **..... $p<.01$ *..... $p<.05$ (c)..... $p<.20$

(博士課程大学院生)

が強くなれば、それだけ対人関係が独自の思考に頼り、ややもすればパラノイッシュ傾向にも陥る危険性があるという事を示すものであろう。

また、攻撃内容の M 反応に関して、両貧型のタイプの被験者が攻撃的内容を見る事が少ないという事を示している。しかし、攻撃的内容が全般的に反応頻度が少なく、多くの事をここで語ることはできないけれど、プロットの中に攻撃的内容を投影して、本来有している攻撃性を代理しているとするならば、むしろこういったものを少量反応することは、自我機能の健全な働きとして考えてもよいのかもしれない。

以上の結果より、体験型の違いによって対人関係の処理が、外拡優位な場合は、より意識的レベルでされやすく、内向型はより無意識的に処理するという特徴がある事が示されたと思われ分析 3 の仮説は一応その点で支持されたと思われる。

〔結 論〕

ロ・テストの色彩因子は、外界への情緒的な反応性の情報をわれわれに提供する指標であり、運動因子である M 反応は、内的素質、及び対人関係でのあり方に対する指標となるものである。

これら色彩因子・運動因子の両者を用いて、人間のタイプを分類したもので“体験型”という概念が古くより用いられている。この体験型によって分類されたタイプは、リビドーの向かい方という機能の仕方の違いによって捉えていったものであり、それらの中に、自我の強さ、適応水準の違いが当然みられるであろうと考えられる。

本研究においては、外的適応水準を異にすると見込まれた大学生、神経症者、精神分裂病者の群を対象として、それらの外的適応水準と体験型の関係から自我機能について調査し、また対象関係の違いを M 反応内容に求め、更には大学生、神経症、精神分裂症という外的適応水準の枠組みを越えた体験型の各タイプ別による人格の共通構造の上にもみられる対人関係のあり方を調べてみる事にした。

結果は以下の通りである。

分析 1

M 反応：St 群が最も多くの M 反応を投影し次いで N 群、Sch 群の順で少なくなっていった。

St 群と N 群の間では有意な差を示す傾向があり、St 群と Sch 群の間には有意差がみられた。

$EC+C'$ ：Sch 群と他の 2 群の間に有意差があり、Sch 群が色彩反応を投影する事が少ないという結果を得た。

$H\%$ ：St 群と Sch 群の間に有意差があり、Sch 群は St 群に比べ人間反応を見る割合が乏しかった。

分析 2

体験型：3 群間の体験型に違いが認められ、Sch 群は有意に両貧型のタイプに属するという結果を得た。

M 反応の型：N 群には、blocked M を投影する事が少なく、flexor M をみる事が多い傾向があった。

Actor 内容：Sch 群は、架空の人物、衣に身を包む人を M 反応内容として投影する事が他の 2 群より多く、また N 群は、人間の全身像でなく身体部分（主として顔）を反応する事が多かった。

Action 内容：何らの知見も得られなかった。

分析 3

M 反応の型：内向型に属する被験者に、flexor M を反応するものが、他の群に比べ多かった。

Actor 内容：外拡型の人は、M 反応内容を動物 (A) に置きかえる事が少なかった。内向型の人は、人間の内容を若干脚色する傾向があった。

Action 内容：被害的内容をもつ印象を、内向型の人は反応する事が多かった。

以上の事柄よりみるに、St 群と N 群は、体験型、M 反応数、色彩反応等からみて、人格構造そのものに大きい差は認められず、両者のそれは同次元の流動可能のものと推測される。しかし M 反応内容等詳細に分類した時両群間にニュアンスの違いがあり、機能の仕方には恐らく差異があるのだろう。

一方、上記 2 群と Sch 群の間には、両貧型の体験型が多くみられた事等に示されるように、人格構造上すでに異次元のものが想定されるように思われる。

また、体験型に示された情報が、対人関係における defense mechanism を提供しているという事も見逃せない知見と思われる。

参 考 文 献

- Bash, K. W. (1955) Einstellungstypus and Erlebnistypus: C. G. Jung and Hermann Rorschach. J. proj. Tech., 19, 236~242.
- Dana, R. H. (1968) Six constructs to define Rorschach M. J. proj. Tech. and Pers. Assess., 30, 138~145.
- Endicott, N. A., and Endicott, J. (1964) The relationship between Rorschach flexor and extensor M responses and the MMPI. J. clin. Psychol., 20, 388~389.
- Hartmann, H. (1958) Ego Psychology and the Problem of Adaptation. International Universities Press. (霜田静志・篠崎忠男訳 (1967) 自我の適応—自我心理学と適応の問題—誠信書房)
- Hammer, E. A., and Jacks, I. (1955) A study of Rorschach flexor and extensor human movement response. J. clin. Psychol., 11, 63~67.
- Hammer, M. (1966) A comparison of response by clinic and normal adults to Rorschach Card III human figure area. J. proj. Tech. and Pers. Assess., 30, 161~162.
- 林悦子 (1974) ロールシャッハ・テストにおける M 反応の研究—Y・G 性格検査との比較において—ロールシャッハ研究 XV-XVI, 71~87. 金子書房。
- 林悦子 (1975) ロールシャッハ・テストにおける人間像と適応について。ロールシャッハ研究 XVII, 59~80. 金子書房
- 井上和子 (1965) 心的機能の弾力性について—ロールシャッハ・テストによる研究—ロールシャッハ研究 VIII, 57~70. 牧書店。
- 片口安史 (1960) ロールシャッハ・テスト, 心理診断法詳説, 牧書店
- 河合隼雄 (1969) 精神科学全集 20, 臨床場面におけるロールシャッハ法, 岩崎学術出版社。
- Klopper, B. et al (1954) Developments in the Rorschach Technique. vol. I-II, world Book Co.
- Kurz, R. B. and Capone, T. A. (1967) Cognitive level, role-taking ability and the Rorschach human movement response. Perceptual and motor skills., 24, 657~658.
- 宮教授還暦記念論文集刊行会 (1968) ロールシャッハ運動反応の研究, 宮教授還暦記念論文集
- Mueller, W. J., and Ables, N. (1964) The components of empathy and their relationship to the projection of human movement responses. J. proj. Tech., 28, 322~330.
- 村上仁 (1971) 精神病理学論文 2, 第 4 部, みすず書房
- Parker, R. S. (1963) The perceiver's identification of the figure in the Rorschach human movement response. J. proj. Tech., 27, 214~219.

京都大学教育学部紀要 XXIV

- Parker, R. S. (1965) The acceptability and expression of attitudes associated to the Rorschach human movement response. *J. proj. Tech., and Pers. Assess.*, 29, 83~92.
- Parker, R. S. and Piotrowski, Z. A. (1968) The significance of varieties of actors of Rorschach human movement response. *J. proj. Tech., & Pers. Assess.*, 32, 33~44.
- Pruitt, W. A. (1964) Rorschach empathy-object relationship scale. *J. proj. Tech.*, 28, 331~336.
- Rorschach, H. (1921) *Psychodiagnostik*. Bern. (東京ロールシャッハ研究会訳 (1970) 精神診断学. 牧書店)
- 高橋雅春 (1970) ロールシャッハ解釈法, 牧書店
- Tau'bee, E. S. (1961) The relationship between Rorschach flexor and extensor M responses and the MMPI and Psychotherapy. *J. proj. Tech.*, 25, 477~479.
- 橘玲子 (1974) ロールシャッハ法の類型分析と精神分裂病の初期の崩壊について, ロールシャッハ研究 XV, XVI. 金子書房
- Xetherhorn, M. (1956) Flexor-extensor movement on the Rorschach. *J. Consult. Psychol.*, 20, 204.

註

注 1 Klopfer, B. et al. (1954) *Developments in the Rorschach Technique*, vol. I, world Book co.

注 2 色彩因子に対する分類基準は, 以下の論文基準に従った. 高橋玲子 (1974) ロールシャッハ法の類型分析と精神分裂病の初期の崩壊について. ロールシャッハ研究 XV, XVI, 金子書房.